

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

指導スタイルとパーソナリティ、社会的スキルの関連に関する一考察：ジュニアラグビー選手を対象とした予備調査結果

著者	中澤 史，上野 雄己，苑田 右二，梶内 大輝
出版者	法政大学スポーツ研究センター
雑誌名	法政大学スポーツ研究センター紀要
巻	35
ページ	7-10
発行年	2017-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/13181

指導スタイルとパーソナリティ、社会的スキルの関連に関する一考察 — ジュニアラグビー選手を対象とした予備調査結果 —

Consideration about the relation of the coaching style, the personality and the social skills — A preliminary survey of the junior rugby players —

中 澤 史 (法政大学国際文化学部・大学院スポーツ健康学研究科)

Tadashi Nakazawa

上 野 雄 己 (日本学術振興会特別研究員 PD)

Yuki Ueno

苑 田 右 二 (法政大学大学院スポーツ健康学研究科)

Yuji Sonoda

梶 内 大 輝 (法政大学スポーツ健康学部)

Daiki Kajiuchi

要 旨

ジュニアラグビー選手 16 名を対象に、高校時代の運動部活動において享受した指導スタイルを専制型と民主型に大別し、各指導スタイルが選手のパーソナリティの発達と社会的スキルの向上に与える影響に関する予備調査を試みた。その結果、それぞれの選手のエゴグラムはともに NP 優位の N 型であることから、指導スタイルに関係なくジュニアラグビー選手は他者肯定型のパーソナリティを有する可能性が示唆された。また、各指導スタイルにおける選手の社会的スキルの違いに着目すると有意差を認められなかったものの、効果量の観点から、トラブル処理を除いて、総じて民主型の選手の方が社会的スキルの得点が高いことが示された。このことから、青年期後期に位置するジュニアラグビー選手の指導においては、選手の自主性を重視した指導スタイルの方が社会的スキルの獲得を促進する可能性が示された。

キーワード：指導スタイル、パーソナリティ、社会的スキル

Key words: Coaching style, Personality, Social skills

I. はじめに

ガルウェイ (1976) は「熱心すぎる指導は選手をダメにする」、また石井 (2007) は「指導者が熱心すぎる場合、指導者の理想とするチーム作りや競技目標に向けて選手を指導してしまうといった主客転倒のパターンに陥ってしまう場合がある」と述べている。このことを裏付けるかの如く中村 (2012) は、昨今のスポーツ界において「自ら考え、判断しようとする選手が増えている」と主体性や自主性に乏しい選手の存在について言及している。この背景には、指導者が一方向的に指導し、選手はその指導にただ従ってきただけという構図が見え隠れする。「目標がある選手を目標達成まで導く」というコーチングの語源を踏まえるならば、本来の目的とは少し違った指導が行われているのではないかと考えさせられる。

ド・シャーム (1980) は自律性－他律性という次元から内発的動機づけを捉え、それをチェスになぞらえて、人が自分自身をチェスの「指し手」だと感じているのか、または他者の意図や指示に応じて動かされる「コマ」だと感じているのかによって得られる成果やパーソナリティに違いが生じると

指摘している。前者の思考のもとでは積極的・主体的なパーソナリティの形成が、一方後者の思考のもとでは受動的・消極的なパーソナリティの形成が想像される。

佐藤 (1997) は「自分の意志で自主的に活動できているか否かが競技成績に関係する」、中澤・杉山・山崎 (2009) は「積極的・主体的な側面が強い選手ほど競技成績に優れる」と報告していることに鑑みると、指導者は選手が掲げる目標を念頭におきながら、選手が自ら考え、成長していくためのきっかけ作りや手がかりを与えるような指導を施す必要もあるといえる。つまり指導者には、選手の成長につながるような働きかけをしながら、選手が育つ過程を見守り「選手を育てる」のではなく「選手は育つもの」といった意識も持ち合わせておくことが求められるのである。

選手やチームに対するリーダーの影響力や積極的な働きかけのことをリーダーシップ (指導性) と呼ぶ。Lewin, Lippitt, & White (1939) は、このリーダーシップのスタイルを専制型、民主型、放任型に 3 分類した。専制型は、すべての権限を握り、メンバーやチームを意のままに動かそうとする指導スタ

イルを指す。このスタイルのもとでは競技成績は向上する一方で、選手は自立心や自発性に乏しく協調性に欠け攻撃性が高くなる傾向がある。民主型は、チームの運営方針や目標を設定する際に選手の意見を取り入れる指導スタイルを指す。このスタイルのもとでは選手の自発性や親和性が促進され、チームワークも高く、競技成績も良好となる。放任型は、選手に何ら働きかけをせず、リーダーとしての役割を遂行しない名目リーダーを指す。このスタイルのもとでは選手はチームの方向性や活動内容などを理解できず、選手間およびリーダーに対しても非協力的、攻撃的な態度をとりがちになるため期待するほどの競技成績を得ることは困難である。

マートン (2013) は、指導スタイルを命令スタイル、従順スタイル、協調スタイルに大別した。命令スタイルでは、指導者が決定権を握り、選手は指導者の命令に服従することになる。知識や経験に勝る指導者が選手に指示するこのスタイルは全ての指導スタイルの基礎となり、広くプロスポーツや運動部活動の世界で取り入れられている。一般に勝利を第一目標とする場合にはこのスタイルが効果的であるが、このスタイルは選手を抑圧する可能性を含んでいることが最大の課題であると言われている。加えてマートン (2013) は、このスタイルを採用する指導者は「才能ある選手以外はすべて遠ざけてしまう」と警鐘をならしている。

「Athletes First, Winning Second」を志向し、選手の身体的、精神的、社会的な成長を支援するならば、協調スタイルが望ましいとマートン (2013) は主張している。選手と指導者が協調しながら決断を下すこのスタイルのもとでは、指導者は選手自らが目標を設定し、その達成のために努力することを学ばせることができる枠組みや規則を提供することになる。一方でこのスタイルの課題は、指導者が選手を指導する割合と選手自らが思考し取り組む割合のバランスをどのように調整するかということになる。なお、指導者の責務を放棄する従順スタイルは最も望ましくない指導スタイルであると報告される (マートン、2013)。以上の Lewin et al (1939) とマートン (2013) の指導スタイルの理論を集約すると、専制型＝命令スタイル、民主型＝協調スタイル、そして放任型＝従順スタイルとまとめられそうである。

これまで既観してきたように、スポーツ場面で展開される指導スタイルの在り方は勝敗だけでなく選手個々のパーソナリティにまで影響を及ぼす可能性がある。そこで本研究では、指導スタイルと選手の心理的側面の関連について次の観点から検討する。①各指導スタイルにおける選手のパーソナリティについて交流分析理論を下敷きとしたエゴグラムを用いて5つの自我状態の立場から検討する。ここでは選手のパーソナリティを客観的に捉え統計処理を施すことから、先行研究 (例えば、中澤ら、2009) において実績が認められる東大式エゴグラム (東京大学医学部心療内科 TEG 研究会、2000、以下エゴグラムと略) を採用することとした。②選手のパーソナリティの詳細を探るためスポーツ場面で不可欠となる対人関係スキルの一側面である社会的スキルを取り上げ、各指導スタイルにおける相違について検討する。ここでは中村 (2017) などにおいて実績が

認められる Kikuchi's Scale of Social Skills (菊池、1998、以下 KiSS-18 と略) を社会的スキル診断尺度として採用することとした。なお、本研究では指導スタイルとして Lewin et al (1939) の理論を採用し、選手のパーソナリティと社会的スキルの得点の差異を比較することによって指導スタイルの違いが選手の心理的側面に及ぼす影響について検討する。

II. 方法

1. 調査時期

X 年 4 月

2. 調査場所

首都圏の 4 年制私立大学

3. 調査対象者

試合場面において意思決定の全てが選手に委ねられるラグビーでは、本研究で焦点付ける指導スタイルの差異が明確化されと考えられる。そこで、ここでは本研究の主旨に同意を得られた男性ジュニアラグビー選手 16 名 (平均年齢 18.06±0.25 歳：全て大学 1 年生) を調査対象者とした。また調査対象者の競技レベルの統制を図るため、全員が高校時代に全国大会に出場経験があることを条件とした。なお、本研究ではサンプル数が少ないこと、ならびに指導者の責務を放棄する従順スタイルは最も望ましくない指導スタイルであると報告 (マートン、2013) されており、全国大会に出場する高校レベルの指導スタイルには合致しないであろうと考えられることから放任型を除く 2 つの指導スタイル、つまり、専制型と民主型の観点から分析することとした (表 1)。

表 1 指導スタイル別の調査対象者の内訳

指導スタイル	専制型	民主型
人数	8 名	8 名

4. 調査方法

フェイスシート、エゴグラムおよび KiSS-18 を用いた集合調査法による質問紙調査を実施した。フェイスシートには、氏名、年齢、高校時代に享受した指導スタイル、競技成績等のプロフィールの記入を求めた。エゴグラムは、表 2 に示す 5 つの自我状態の発生頻度に基づき個人のパーソナリティを診断するための検査である。KiSS-18 は、問題解決、トラブル処理、コミュニケーションの 3 因子で構成される社会的スキル診断検査である。なお、調査対象者には守秘義務の厳守および得られたデータは選手起用等には全く影響しないことを説明し、研究へのデータ使用の了承を得た。

表 2 5 つの自我状態

CP: 義務感、責任感、信念、理想の追求などの側面に関わる心性
NP: 受容、思いやり、自他の心身の育成などの側面に関わる心性
A : 論理性、合理性、客観性、計画性などの側面に関わる心性
FC: 自主性、活動性、積極性、創造性などの側面に関わる心性
AC: 協調性、社会性、妥協、依存などの側面に関わる心性

5. 分析方法

各指導スタイルにおける選手のパーソナリティの相違を検討するために各エゴグラムを比較した。また、各指導スタイルにおける選手の社会的スキルの得点の差異を比較検討するために KiSS-18 の総得点および 3 つの下位尺度ごとに対応のない t 検定を行った。その際、水本・竹内 (2008) に倣い、有意水準 (p 値) とサンプルサイズに影響されない効果量 (Cohen's d) を総合的に解釈することとした。なお、分析には HAD15.011 (清水, 2016) および SPSS20.0 を用いた。

Ⅲ. 結果

各指導スタイルにおける選手のエゴグラムを図 1 に示した。また、各指導スタイルにおける選手の社会的スキルの差異を検討するために、対応のない t 検定を施した結果、「総得点 ($t(14) = 1.75, n.s., d = 0.87$)」、「問題解決 ($t(14) = 1.45, n.s., d = 0.73$)」、「トラブル処理 ($t(14) = .29, n.s., d = 0.15$)」、「コミュニケーション ($t(14) = 2.00, p < .10, d = 1.00$)」であり、コミュニケーションのみ、民主型の方が専制型と比較して有意に得点が高い傾向が示された。また、総得点および問題解決、コミュニケーションともに Medium から Large の効果量 ($d = 0.73-1.00$) が確認された (表 3)。

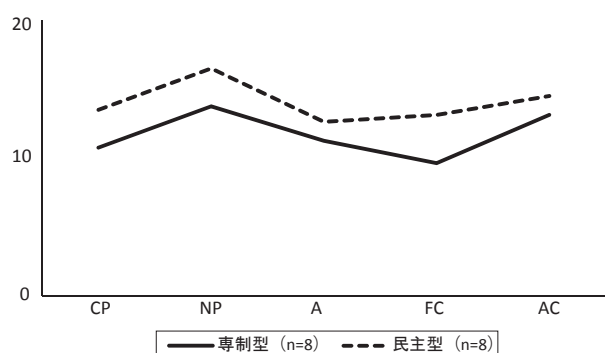


図 1 専制型と民主型におけるエゴグラムの比較

Ⅳ. 考察

選手のエゴグラムはともに NP 優位の N 型であることから、指導スタイルに関係なくジュニアラグビー選手は他者肯定型のパーソナリティを有する可能性が示された。この結果は、競技レベルが高い大学生のテニス選手のパーソナリティが自己肯定型であったという先行研究 (中澤ら, 2009) に鑑みると、他者肯定型のパーソナリティが形成された背景にはラグビー独自の競技特性が影響しているのかもしれない。つまり、「One for all. All for one」といった他者尊重、自己犠牲といった精神が反映されたと考えられる。

また、エゴグラム得点の高低が人の心理的エネルギーの総量を示していることから、専制型の選手と比較して総体的に民主型の選手のエゴグラム得点が高いことは競技場面における選手たちの活発な交流体験の証であろうと推測される。つまり、民主型の方が選手の自主性や積極性を促進する指導スタイルであると考えられる。この結果は、選手の身体的、精神的、社会的な成長支援には協調スタイル、つまり民主型が望ましいというマートン (2013) の主張を支持するものとなる。

各指導スタイルにおける選手の社会的スキルの相違に着目すると、有意差を認めなかったものの効果量の観点から、トラブル処理を除いて、総じて民主型の選手の方が KiSS-18 の得点が高いことが示された。このことから、選手の自主性を重視した指導スタイルの方が社会的スキルの獲得を促進する可能性が高いように思われる。この背景には、民主型スタイルでは指導者が定めた枠組みの中で選手たちが主体的な取り組みを実践している様子がうかがえる。また、試合場面での意思決定が選手に委ねられるラグビーの独自性に鑑みると、個々の自主性を重んじる民主型スタイルの方が社会的スキルや自我状態の促進には望ましいように感じられる。

他方、中学校の野球部に所属する運動部員を対象に指導スタイルと社会的スキル獲得の関連について検討した中村 (2017) では、専制型スタイルの方が選手の社会的スキルを促進する可能性が高いと報告している。この報告は、競技種目は違うものの対象年代において望まれる指導スタイルが異なることを示唆している。つまり、中学生年代では「スポーツ

表 3 専制型と民主型における KiSS-18 得点の比較

	専制型 (n = 8)		民主型 (n = 8)		t 値	df	Cohen's d
	Mean	SD	Mean	SD			
総得点	56.88	11.73	65.50	7.60	1.75	14	0.87
問題解決	20.13	3.76	22.88	3.83	1.45	14	0.73
トラブル処理	16.38	3.20	16.00	1.85	0.29	14	0.15
コミュニケーション	21.63	5.78	26.63	4.10	2.00 [†]	14	1.00

Note)

[†] $p < .10$

Cohen's d : Small = 0.20, Medium = 0.50, Large = 0.80 (水本・竹内, 2008)

活動に社会的スキル獲得を期待するにはサポートする組織や指導者の意識的な関わり方が重要（須田、2011）」である一方、本研究の結果から青年期後期にある高校生から大学生年代では選手の自主性を重視した指導スタイルの方が社会的スキルの獲得を促進する可能性が高いのである。「人間は生まれてから死ぬまで生涯にわたって発達する」と述べ、ライフサイクル理論を提唱したエリクソンの考え方（西平、1993；鏑、2002）を踏まえると、各発達年代において求められる指導スタイルが異なることも了解できる。

V. まとめ

本研究では調査対象者数が16名とごく少数であったため明確な結果を得るには至らなかった。しかし、各指導スタイルにおけるジュニアラグビー選手の自我状態と社会的スキルの獲得状況について検討したところ、総じて民主型の指導スタイルのほうが選手の心理的側面にポジティブな影響を与える可能性が示された。ただし、先述のとおり年代ごとに適した指導スタイルが異なる可能性が指摘されることなども踏まえると、今後はさらに調査範囲を拡大することによって本研究から提出された種々の課題について検討する必要があるだろう。

文献

1. R・ド・シャーム（佐伯 胖（訳））（1980）やる気を育てる教室—内発的動機づけ理論の実践。金子書房。
2. W・ティモシー・ガルウェイ（後藤新弥（訳））（1976）インナーゲーム。日刊スポーツ出版社。
3. 石井源信（2007）コーチングの最新心理学。体育の科学, Vol.57(2), 84-90.
4. 菊池章夫（1998）また / 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル—。川島書店。
5. Lewin, K., Lippitt, R. & White, R.K. (1939). Patterns of aggressive behavior in experimentally created social climates. *Journal of Social Psychology*, 10, 271-301.
6. 水本 篤・竹内 理（2008）研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—。英語教育研究第31巻, 57-66.
7. 中村 豪（2017）指導者のリーダーシップの在り方が選手の社会的スキルに及ぼす影響について。平成28年度法政大学スポーツ健康学部卒業論文。
8. 中村和彦（2012）日本の子供を元気にするために健やかなはぐくみを求めて。健康づくり, 2012年3月号, 12-15.
9. 中澤 史・杉山佳生・山崎将幸（2009）アスリートの自我状態と心理社会的スキルに関する研究。交流分析研究第34巻第2号, 44-50.
10. 西平 直（1993）エリクソンの人間学。東京大学出版会。
11. 鏑 幹八郎（2002）エリクソンとライフサイクル論。ナカニシヤ出版。
12. 佐藤雅幸（1997）TA人生脚本を書き直す方法。KKベストセラーズ。
13. 清水裕士（2016）フリーの統計分析ソフト HAD—機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—。メディア・情報・コミュニケーション研究第1巻, 59-73.
14. 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会（2000）東大式エゴグラム（新版 TEG II）。金子書房。
15. レイナー・マートン（大森俊夫・山田 茂監訳）（2013）スポーツ・コーチング学 指導理念からフィジカルトレーニングまで。西村書店。